

優秀賞

私の挑戦

宮城県気仙沼市立鹿折中学校

2年 小野寺 凜

私が今、熱量を持って頑張っていることは、車いすバスケットボールです。

私は生まれつき足に障がいがあり、歩くことができません。ずっと車椅子で生活してきました。体育の授業では、周りの皆が当たり前走りたり跳んだりしながらボールを追いかけている姿を、私はどこか遠い世界の出来事のように見つめていました。走ることができない私は、スポーツに対して苦手意識を持っていたのです。

そんな私の考えが変わったのは、中学校1年生のときです。2024年に行われたパリパラリンピック女子日本代表の試合に夢中になりました。車椅子に乗ったままでも自分でボールを動かしてゴールを狙える。体が自由に動かなくても、戦える場所がある。そう気づいたときの衝撃は、今でも忘れられません。

それから私は、知人の紹介もあり、地域のスポーツクラブに通い始めました。ただし、人数の少ないクラブのため、基本はマンツーマンでの指導が中心です。コーチは元々チームに所属していた方で、車いすバスケの楽しさと厳しさの両方を教えてくれます。シュート練習やドリブル、ターンに車椅子操作など、基本から徹底的に教わり、毎回の練習で自分の弱点と向き合う日々です。マンツーマンの練習には逃げ道がなく、できないことをごまかすこともできません。だからこそ、自分の成長がはっきりと分かり、少しずつできることが増えていくのが嬉しくてたまりません。

私はまだ、運動が得意とはいえませんが、目立った才能があるわけでもありません。それでも、自分には一つだけ負けないものがあると思っています。それは、好きなことには夢中になれるということです。私は、苦手なことや嫌いなことから逃げてしまうことが多くありますが、車いすバスケは違います。うまくいかないことがあっても悔しさをそのままにせず、次の練習では必ずできるようにになりたいという思いの積み重ねが、少しずつ自分を強くしてくれていると感じています。最初の頃は車椅子を操ることに苦戦しました。スピードもなく空回りしてばかりで、コーチの動きに何とかついていこうと必死だったのを覚えています。楽しさより辛さを感じる練習でしたが、その辛さより「できるようにになりたい」という気持ちが勝っていました。自分のペースでも少しずつ前に進みたいという一心で、コツコツと練習を続けてきました。

そして何より、車椅子を漕いでいる時間やボールを追いかけている時間は、

自分が「身体を使って、何かに挑戦している」と強く実感でき、嬉しくてたまりません。

今は、公式戦に出場することを目標にしています。車いすバスケットには試合に出るための条件やクラス分けがあり、それをクリアするために日々練習しています。最近では、試合を想定した1対1の練習も増えてきて、「相手の動きを読んでどう動けばいいか」を考える時間も増えてきました。まるで将棋のように、一手一手に意味がある世界の中で、自分が少しずつ成長していくことがとても楽しく感じます。

車いすバスケットは、自分にとってただのスポーツではありません。「できない」と決めつけていた自分に、「できるかもしれない!」と思わせてくれたものです。障がいがあっても、自分の力で動いて戦って、夢を持つことができる世界。その存在に出会えたことが、私の人生を大きく変えてくれました。

今年の夏も、来年もその先も、汗だくになりながらコートの上に青春を捧げ、全力で車椅子を漕いでいきます。練習が終わる頃には、毎回ヘトヘトになりますが、その疲れすら「頑張った証」として誇らしく思えます。誰かと比べてではなく、自分がどれだけ前に進めたか。それが私のエネルギーです。

私は、生まれたときから障がいがあったからこそ車いすバスケットに出会うことができたと思っています。高い壁を目の前にして、諦めそうになってしまうこともあります。このハンデも私の美点なので、一緒に何万回もトライして乗り越えていきたいです。

私の熱量は、車椅子のタイヤの音とともに、いつも全力で爆発し続けています。支えてくれている人に恩返しができる日まで。